

# マルクスに對立する貨幣理論批判

## 一、序 説

二、貨幣の生成とその本質規定について

三、貨幣と金との関連性について

武 藤 守 一

## 一、序 説

階級社会においては、真理を探求する科学もまた階級的性格をもち、階級的対立を免れ得ない。それは自然科学たると社会科学たるとを問わない。この場合、真理はただ一つであり、したがってそれを探求する科学に二つの階級的立場はあり得ないとする論者があるとしても、それは抽象的觀念論に過ぎない。ここで問題にしているのは、現実にある科学の姿について述べているのであって、あるべき科学の姿と現実にある科学の姿とを混同してはならない。

科学の階級的性格は、自然科学におけるよりも社会科学においてより明確であり、その社会科学のうちでも経済学の階級的性格はより明確である。それは階級的利害關係がより直接的であるか否かによって相違が生ずるのである。元來、経済学は生れながらにして階級対立の闘争過程において生成したのであった。一層明確に言えば、

経済学は階級闘争の理論的武器として生成したのであり、それ以来常にさうであつたし、現在においても経済学は階級闘争の理論的武器としての役割を果しつつあることに変りはない。重商主義経済学説はすべて、それぞれの時代およびそれぞれの国における商業資本のイデオロギーに外ならなかつた。正統学派はイギリス産業資本のイデオロギーであり、アダム・スミスは自由放任をスローガンとして、国家の保護と干渉と統制を主張する重商主義経済政策を徹底的に攻撃し、リカアドオは自由貿易の利益を主張し穀物条例撤廃の理論的根拠を提供したのであるが、それらはいずれもイギリス・ブルジョアジーの経済的立場を代弁したものに外ならなかつた。彼等はいずれも当時におけるイギリス・ブルジョアジーのイデオログとしての役割を果したのであつた。然し当時のイギリス・ブルジョアジーは進歩的・革進的階級であつたが故に、彼等の経済学は真理を追求し得たのであり、科学的であり得たのであつた。

一八二五年の恐慌によつてブルジョア社会の根本的矛盾は露呈され、それ以来ブルジョアジーのイデオロギーとしての経済学は科学性を喪失しはじめ、ブルジョア社会の弁護論的役割を果すものに顛落した。マルサス、ミル以後のいわゆる俗流経済学がそれである。先進国イギリス・ブルジョアジーのイデオロギーとしての正統学派に対して後進国ドイツ・ブルジョアジーのイデオロギーとしてリスト以下の歴史学派が成立した。他方、ブルジョアジーの反動化とともに、それに対立する進歩的階級としてプロレタリアートの擡頭となり、このプロレタリアートのイデオロギーとしてマルクス経済学が一八五〇—一六〇年代に成立した。このマルクス経済学の労働価値説に対立して、ブルジョアジーはカール・メンガーその他によつて限界効用説を作り上げた。資本主義社会における基本的二天階級たるブルジョアジーとプロレタリアートは、それぞれの経済学を理論的武器として階級闘争

を有利に展開しようとする努力した。いずれの経済学が真理を追求し科学的であるかは、いずれの階級が歴史を推進する進歩的階級であるかによって決定されるであろう。

一九〇〇年を前後して資本主義は独占資本主義となり、その結果としての第一次世界大戦を契機としてロシアに社会主義革命が実現し、ここに資本主義は全般的危機の段階に入るのである。この危機の中で最大限利潤を要求する独占資本は、従来の経済学では役立ち得ず、新しい経済学を要求するに至る。かかる要求に応えるものとして、代表的にはケインズの「一般理論」が展開されたのであった。近代経済学と呼ばれる現代のブルジョア経済学は独占資本の経済学に外ならない。このような独占資本の近代経済学に対し、すでにマルクスの予言の的としての社会主義革命を実現したプロレタリアートは、独占の段階、全般的危機の段階、社会革命の段階に即応するものとして、マルクス経済学の発展としてのレーニン・スターリンの経済学をもち、いよいよ決定的な段階に到達したところの階級闘争の理論的武器となしている（拙著「経済政策学總論」第三章）。

第二次大戦を経て資本主義の全般的危機はいよいよ深刻化し、それは各国における階級闘争の激化となり、それは当然に経済学の階級対立をいよいよ明確にしつつある。それはあらゆる面において二つの経済学の対立点が表示されているのであるが、ここではただマルクス経済学の貨幣理論に対立する理論を批判的に考察することを目的とし、そのためにまず新庄教授の「貨幣論」（岩波全書版）を採り上げることにした。

それは特に意味があるわけではない。われわれが近代経済学の著書を読む場合常に感ずることは、そこには貨幣についての多くの問題が述べられているにもかかわらず、殊に貨幣的経済論として盛んに論議されるにかかわらず、その貨幣とは如何なるものであるかについて、すなわち貨幣の本質論について必ずしも明確な規定に接し

得ないことである。貨幣とは一般的交換手段であるとか、貨幣は物々交換の不便を除去するために生成したものであるとかいうことだけでは、それが如何に難解な表現を採ろうともあまりにも不明確であり不充分である。このような貨幣の本質規定から如何なる理論が展開されようとも、根底の不明確が明確になるものではない。出発点が誤っていれば、それをどのように加工しようとも正しくなることは不可能である。われわれとしては、明確な貨幣本質規定がなされなままに貨幣の諸問題が展開されているのを遺憾とする。ところで新庄教授もわれわれと同様に次の如くいわれる、「實際ハイエク、ケインズ等を先導者とするいわゆる貨幣的経済理論は、既存の貨幣理論を足場としてその上に発展したものではなく、これは関係のない全く異質的な考え方から成立している。……ケインズの『一般理論』に就ては貨幣が極めて重要な役割を演ずること周知のごとくであるが、その書物の中では貨幣そのものの分析はどこにもなく、ケインズの貨幣に関する見解は『一般理論』以前に於ける彼の『貨幣論』の見解をそのまま用うべきもののごとくである。しかし例えは『一般理論』にてでくる貨幣単位(貨幣単位)と労働単位の二つが貨幣と如何なる関係をもつものか、従来のケインズの名目的貨幣概念を以てりする限処理し得ない問題として残る。その他の点に於ても、ケイン理論に於て貨幣概念のより明確に規定される必要を感ずるのは必ずしも私一人ではあるまい」(新庄「貨幣論」序文、三四頁)と、近代経済学における貨幣理論の欠如または貧困を指摘されているのである。

かくして、教授は「貨幣経済の分析のために真に合目的なごとき形に貨幣の理論を檢定し、そのためには貨幣が如何に概念せらるべきかをもう一度改めて検討する必要があるのではないか」(同上、五頁)と問題を提起される。そのために教授は名目主義貨幣理論に対する批判を展開し、その基本的問題として、「貨幣を単に国内的方

至國家的制度としてのみ把握するときには本位貨幣の必然性は理解せられず、兌換停止すなわち金本位制の廃止と解釈されることとなるであろう」という点、および「国内的たると國際的たるとを問わず、資本制經濟に於ける交換の特質が等価交換であることが注意せられないとすれば客觀的なる価値尺度の必然性は理解せられず、『価値の單位』もしくは『価値の基準』から區別せらるべき『価値の單位』もしくは『価値の尺度』機能が認識されず、兩者は單純に同一視せられ、混同されることとなる』という点、この二点を指摘される（同上、五一―六頁）、これに続いて教授は次の如くいわれる、自分の主張は「いわゆる名目主義的貨幣理論を批判する形に於てこれに代るべき見解を主張することとなるのであるが、もとよりそれによって名目主義理論の總てを否定しようとするものではない、しかし我々をして云わしむれば現在尙金が無視すべからざる重要性をもつ以上どもとも金が貨幣に對して如何なる本質的關係を有するかの解明をこそ貨幣論に課せられたる最大の任務とすべく、殊更にその現實に於ける必要を黙殺するための論理を發見することにあるべきではない、そしてかかる現實に即する態度こそがまた當然に貨幣經濟の構造的及び經過的分析を自己の課題とする貨幣的經濟理論に對して貨幣論が奉仕する所である」と（同上、六一―七頁）。

以上の如くして、新庄教授は貨幣的經濟理論は頗る發達したが、その貨幣についての本質論は依然として従来の名目主義貨幣理論から脱却していないのを遺憾とし、名目主義貨幣理論を批判的に發展させ、それによって貨幣經濟理論に「奉仕」しようと考えたのである。教授の指摘される名目主義貨幣理論の問題点は、マルクス貨幣理論の立場からも當然指摘されるべき点ではあるが、然し教授はそれをマルクス貨幣理論の立場からではなくして解決しようとし、それによつて貨幣的經濟理論に「奉仕」されようとするのである。そのような「奉仕」がどの

ように遂行され得たか、それがマルクス貨幣理論の立場からどのように評価し得るか、さらに具体的にはそれが独占資本の経済学たる近代経済学をどのように武装し、現代の激化しつつある階級闘争においてどのようなように独占資本に役立ち得るものとなるか、われわれは多大の関心をもたざるを得なかつた。新庄教授の「貨幣論」はいうまでもなく直接マルクス貨幣理論を批判する目的で書かれたものではないけれども、以上のような意味においてまず最初に採り上げたわけである。

## 二、貨幣の生成とその本質規定について

まず最初に問題となるのは、貨幣の生成とその本質規定についてである。貨幣の生成についての問題と貨幣の本質規定とは不可分のな関連をもち、貨幣の生成をどのように把握するかによって、その中に既に貨幣の本質規定が与えられて来るからである。例えば貨幣の生成を物々交換の不便を除くためにということに求めるところからは、当然に貨幣の本質が一般的交換手段であるとせられるが如くである。

ところで、新庄教授は貨幣の本質規定のためには貨幣の生成過程の追求はあまり重要ではないとされる如くである。すなわち「抑々の当初に於ける貨幣に関するこれらの諸点が明確にされねば現代の貨幣の性質が確認されないわけではなく、また仮りに原始時代の貨幣の性格が明確にされたとしても、それを根拠として現代の貨幣が説明せらるべきものでもない。むしろ現代の貨幣に関する理論の展開にとってそれらがさしたる重要性をもつものでない……」と(新庄「貨幣論」七頁)。その理由として次の如く述べられている。すなわち貨幣は古くから存在したものはあるが、「まことに或る時代及び或る経済組織の下に於ける貨幣の機能をより深く分析すればす

るほど、それが他の時代及び他の経済組織の下に於けるそれに必ずしもそのまま当てはまるものでないことが覺られるに相違ない。等しく貨幣と呼ばれるとしても、古代の、中世の、近世の、及び現代の貨幣は夫々その態様に異なるものがあり、封建時代の、資本制経済のそれ、また社会主義に於て、共產主義に於て貨幣と呼ばれるものの機能は夫々に異なるものがあるにちがいない。またそこで貨幣が如何なる意味に於て学問的な研究対象とされるかについての実践的関心にも必ずや異なるものがある。……貨幣に関する問題意識がそのように發展してくれば、当面する経済の全般の問題から隔離して、貨幣を貨幣として云わば抽象的に、孤立的に論議することが殆ど全くその意義を失うことは明らかであろう。従つて一の社会科学としての貨幣の研究は当然にその貨幣の存在する経済全般のよりよき認識のために役立ち得ることと形のものでなければならず、總ての社会科学が歴史的な理論たる性格をもつべきものとされるごとくこれも亦当然その性格をもつものであらねばならぬ。もし貨幣理論が抽象的であり、皮相的であればあるほど、それが経済のより深き分析を志さず経済学にとつて役立つことがそれだけ少ないことは見易い道理であろう」と(同上、四一五頁)。

以上の如き教授の所論は、あるいは名目主義に対する問題指摘としては、教授のいわれる如く「了解さるべきである」(同上、七頁)ことであるかも知れない。しかもそのいわれるところの「歴史的な理論」が果して教授目からよつて実現されているかといへば、名目主義とは異つた意味において、名目主義と同様に「歴史的な理論」が否定されてしまつてゐる。われわれはまず教授の「歴史的な理論」そのものに対する理解に疑問をもたざるを得ない。このような点から教授の理論の検討を始めよう。古代においても既に貨幣が存在していたことは何人といへども認めてゐるところであり、教授自身も認められるところである。したがつて古代ギリシャにおいて既に

存在し流通していた貨幣をアリストテレスは考察したのであり、しかも彼は貨貨について驚くべき科学的見解を述べているのである。そのことについては認められるところであり、アリストテレスによって「既に貨幣や交換に関して現代に通用する基本的な理論が示されていることは否定できない」といわれている（同上、二頁）。然るに、このようなアリストテレスの貨幣観について、「果して紀元前四世紀の彼の時代に、貨幣が言葉の真実の意味に於ける『均等化』や通約化のための『尺度』として役立つほど、経済は一般的に発達していたであらうか。もしそうでないとすれば、彼の貨幣に対する所説は経済のより發展せる時代の、遙かに後世の貨幣を対象として始めてよく妥当するものと云えよう。この意味に於て彼の貨幣観は彼の時代の現実の貨幣を対象とすると云うよりも、いつの日か彼の時代の後に來るべき貨幣の理想図を描いたもの……」（同上、三〇頁）に過ぎないかの如くに教授はいわれる。ここにわれわれは教授の独断を思わざるを得ない。

このような独断が生じたのは、思うに教授の次のような所論の中に根ざしている。すなわち「貨幣の生成は遠く数千年の過去に遡ると云われる。通常我々はそのように古い時代に於ける貨幣をも今日の貨幣と同様に貨幣と呼ぶのであり、この場合には古今東西に互るあらゆる貨幣に貨幣としての同質的なものを認めようとしている。しかし我々の学問的研究に於ては、過去の時代に於ける貨幣の経済生活に対する地位、その形態、その役割と後の時代に於ける貨幣のそれとが如何に相違するかをできるだけ明確に區別することがより重要である」（同上、三頁）とされ、貨幣の歴史的特殊性を指摘することに急ぎあり、あまりにもこの点を不当にまで強調され過ぎることから生じたのではなからうか。われわれといえども、古代社会における貨幣と現在の貨幣とを同一視するものではなく、また資本主義社会における貨幣と社会主義社会におけるそれとを同一視するものではない。然し同

一視しないということは、それぞれを孤立的に考察すべきであるというのではなく、逆にそれらを緊密に結びつけて、それを貨幣の発展として、同一のうちの特殊として、それを発展の過程の中で把えなければならぬと考へる。貨幣は生成した当時の姿のまままで現在にまで至つたと考へることは全くナンセンスである。貨幣は一定の社会的条件下で生成し、その機能を果すために当然にもつべき形態があつたのである。そのような貨幣は、商品流通の発展に伴うて貨幣もまた発展し、種々の諸機能を果すに至るのであるが、それらの諸機能の発展に伴うて、それに即応するところの諸形態をもつに至つたと考へるべきである、貨幣の諸機能の発展も、それに伴う諸形態の発展も、それは決して偶然的なものとしてではなく、貨幣発展の合法則性として、しかもその基盤である商品生産・商品流通の発展の合法則性の上において把えられねばならない。これこそがわれわれにとって「歴史的な理論」なのである。

然るに教授は、このような貨幣機能及び諸形態を貨幣発展の合法則性の中で把えようとせず、「貨幣の形態や役割は時代によって異なるのみならず、同じ時代に於ても国によって同一ではない、……更にまた同じ時期、同じ国に於て等しく貨幣と称せられるものに素材、形態を異にする各種のものが併存する、……しかも或る場合にはその通用価値が地金としてのその素材価値と全く等しくせられるが、他の場合には両者の間に甚しい相違が存するごとく造られる、……そのほか貨幣は法的見地から、合法的貨幣すなわち法貨と法貨にあらざるものとの區別があり、貨幣法上の本位貨幣及び補助貨幣の種別もある、……等しく貨幣と呼ばれるものについてその中味に多種多様のものが含まれること右のごとくである、しかもその或るものは既に消滅し、他面将来新しい形態の貨幣が現われぬとも限らない」(三二―四頁)といわれ、それらの貨幣諸形態が恰も偶然的な孤立的なものであ

って、それらの間に合法的な必然的関連性があることを認めようとされない。だからこそ、それに続いて教授は、「もし我々の研究に於ても日常用語に倣い、この一点のみに關聯して貨幣概念を立てるものとするならば、上述せる如き異質的内容が抹殺せられ、まさにそれらの分析を事とすべき我々の研究にとって甚だしい困難と不便を伴うことが予期されるべきであろう。科学にとつて何よりも重要なことは同質的なものを綜合するともにもあらゆる異質的なものを分析し、それを明確に區別することであらねばならない」といわれるのであるが、そこにおける同質的なもの・異質的なものとは何を根拠にしているのか、現象面に把らわれて内的必然的関連性を見失うならば、それは「歴史的な理論」ではなくして觀念的機械的獨断論とならないであろうかをわれわれは疑う。

われわれは、貨幣が何千年という永い商品交換の發展のうちに發展する価値形態の發展の窮局の姿として貨幣形態が形成され、ここに貨幣の生成を見るのである。さらに何千年という永い商品流通⇨貨幣流通の發展のうちには貨幣の諸機能は發展せしめられ、それに伴うて諸形態もまた發展して現在に至つたものと認識しなければならぬ。かくしてこそ実は教授のいわれる如く、貨幣を「それら相互の間の立体的關係を分析」（同上、五三頁）し得るが如き認識に到達し得るであろう。教授は、「我々は貨幣の本質的機能を一般的交換手段及び一般的価値尺度として認識した」（同上、四九頁）といわれるけれども、そのような貨幣が或る時代に一瞬にして生成したのではない筈である。教授もいわれる如く、人類は当初からして社会生活を行つていたのであるが、その原始共同体においては交換のある筈なく、したがつて貨幣存在の余地はない。交換は原始共同体の尽きるところで、他の共同体との間に初めて偶然に行われたのであった。そのような交換においては、これまた教授のいわれる如く等価交換の原則によつて行われたのではなくして「個人主観的評価が大」であつた。すなわち「原始民族に於ける強

制交換、沈黙交換のごときはむしろ一方的流通に近く、交換が等価で行われたと見るべき保証は何もない。中央アフリカの一種族が夜陰他種族の果物畑に侵入して果物を奪い、その代りとして自ら携え来った乾肉を残して行き、またニューギニアの一種族が自己の生産物を森の中に持って行って大声を發して去り、この声に應じて隣り部落の者が他の生産物を携えて現われてまた去り、この間に両者直接顔を合すことなくして交換を成立せしめた」と云うごとき事例の示す沈黙交換に於て」（同上、四三頁）も等価交換でなかったことはいうまでもない。したがってかかる交換の段階において、諸商品の等価物としての貨幣が生成し得なかつたこともまた当然である。然るに教授は、かかる段階においても既に「交換が間接交換の形で、貨幣を媒介として行われたであろうことは明瞭である」（同上、四四頁）とされ、しかもさらに「一般的交換手段・一般的価値尺度としての機能は貨幣發生の当初に於ける貨幣には必要でなかつた」（同上、四三頁）といわれるが、そのようなものを誰が貨幣といったのか、誰がいったにかかわらず教授自身がそれを貨幣とする根拠は少しも示されていないではないか。

交換が偶然的なものとして、したがってその場合における交換比率が全く主観的評價によって規定されるような等価交換の行われないうちに、諸商品の等価物としての貨幣の存在の余地があり得ないことはあまりにも明白ではないか。然し問題はそれで終つたのではなく、かかる偶然的交換も生産力の發展に伴うて次第に頻繁となり、交換の頻繁化は交換の規則化恒常化をもたらし、かかる發展過程のうちに自から次第に等価交換の原則が發展するのである。それは一挙にして成立したものではなく、交換の何千年という永い歴史的事實の堆積の上に成立したものと考へねばならない。このような交換の發展のうちに最も頻繁に交換に出された商品が、最も頻繁に交換に出されたが故にこそ、最も多くの諸商品の価値を表示することとなり、そのような社会的機能を果すこと

において一般的等価物という特殊な機能が生れ、そのような特殊な機能を営む地位にいた商品が諸商品のうちから特殊な商品として抽出され、ここにその特殊な商品は貨幣商品となり、貨幣となるのである。このようにして成立する貨幣商品は、成立の当初から特定の商品に終局的に固定するのではなく、ある時はA商品が、それがやがてB商品という如く変動することは止むを得なかつたし、また社会が異れば異つた商品がその役割を果すという事情にあつたことも認められねばならない。かくして古代においては家畜・貝殻・石・毛皮等々無数の貨幣商品が流通したのを知るのである。然しこれらの貨幣商品はいずれも諸商品の等価物であるが故に、諸商品と共通した価値物でなければならず、したがってそれらは当然に労働の生産物でなければならぬ。ところで新庄教授は「初期の貨幣は貝殻・家畜・石塊のごときそれ自ら労働の生産物でないものですら事足りたのである。穀物・布・塩・金属片と云うごときその産出に労力を要するものを用いたとしても、それは偶々用いられたと云うに過ぎない」と見るべきであり……」（同上、四四頁）といわれているが、それは如何なる意味であるか。貝殻・家畜・石塊は穀物・布・塩・金属片と全く同様に人間労働の生産物であり、したがって価値物であつたからこそ一般的等価物となり得たのであり、貨幣商品となり得たのであつたと解すべきではないか。

既に述べた如く、生産力の發展——交換の發展——交換の規則性と恒常性——等価交換の原則・価値法則の發展——一般的等価物の成立——等価物の特定商品への固定化として貨幣商品が成立し、それが貨幣となつたのであつた。ギリシヤにおいては既にホーマーの時代に牛が一般的等価物の機能を果しつつあつたが故に（グラウカスの鑑は牛何頭に値するというが如くに）牛が貨幣であつたのである。その後におけるギリシヤの商品流通・貨幣流通の發展によつて、プラトン、アリストテレスの時代においては既に金属貨幣が流通するまでになつていた。

そのような貨幣流通の中において、彼等は貨幣を觀察したのであるから、彼等の偉大な頭腦に上述した如き諸商品の価値を一般的に表示するところの等価物としての貨幣の本質が反映しない筈はなかつた。アリストテレスはそれを、「交易せらるべき事物がすべて何等かの仕方と比較可能であることを要し、この目的のためにこそ貨幣は發生し、これが或る意味における媒介者となる。……かくて貨幣を云わば尺度とし、貨幣がすべての通約者となることによつて均等化が實現される。實際交易なくしては共同關係が生れないのであるが、交易は均等化なしには存在せず、均等化はまた通約性なしには存在しない。もちろん著しく差異のある各種のものが通約せらることは本来は不可能であるが需要と云うことを考慮することによつて充分に可能となる。だがそのためには何らか單一なるものの存在が必要とされ、かかるものが協定に基いて生れる。貨幣と云う名称の付せられた所以である。これがすべてを通約的ならしめ、あらゆるものが貨幣によつて計量されるのである」(高田訳「ニコマコス倫理学」二四一頁以下)という天才的表現としたのであった。

アリストテレスはあくまでも当時ギリシヤに流通していたところの貨幣を考察することから以上のような天才的洞察をなしたのであつた。それは新庄教授のいわれる如く、「いつの日か彼の時代の後に來るべき貨幣の理想図を描いたものと云うべく」とか、あるいはそれを「恰も我々が現在の貨幣を論ぜんとして現実の客觀的条件を無視し、いつの日にか來るべき將來の理想的貨幣を觀念的に論ずるに比すべきものであらう。しかしそれは社会科学としての正しい行き方ではない」(同上、三―四頁)とするが如きは、アリストテレスを曲解するものといわねばならない。然しわれわれといえどもアリストテレスの貨幣觀が完全であるというのではない。その欠缺は先に引用した彼の文句にも示されている。すなわち「交易は均等化なしには存在せず、均等化はまた通約化なしに

は存在しない」と論理を正しく追求しながらも、彼はその通約化が客観的にどのようななされていくかを見出し得ないで、「もちろん著しく差異のある各種のものが通約せられることは、本来は不可能である……」と、問題をここで断念してしまつてゐる。それは人間の労働＝価値にまで追求せらるべきであつたが、それはアリストテレスには出来なかつた。それはアリストテレスの能力の故ではなくして、彼の時代の奴隷社会という客観的条件が、人間の労働を抽象することを不可能ならしめていたからである。にもかかわらず、彼の天才的頭脳は当時の商品流通＝貨幣流通のなかに諸商品の均等化を洞察せしめ、貨幣の本質を不充てであつたが、正しい方向において把握し得たのであつた。

既にしばしば述べた如く、貨幣は一般的等価物として成立するのであるが、然し或る特定の商品が一般的等価物たる社会的機能を果たし得るに至るためには、最も頻りに交換過程に出されることが必要である。そのことは一般的等価物の形成過程において、その特定の商品が不充てながらも間接的交換手段たる機能を果たしつつあつた場合が多い。かくして一般的等価物の形成過程は同時に交換手段として一般的交換手段への形成過程であり、この両者の交互依存の關係において發展し、この両機能の統一体として貨幣は成立するのである。然るに新庄教授は、このような貨幣成立の歴史的過程を考察することなく、「交換当事者の実力が平等でなく、交換が市場的に行われない場合には交換は公正に行われ難く、また交換の比率に法則性の認められないことも当然であろう。現代に於ける交換が後に述べることく等価交換の性質を有するのに対して、前時代のそれはかかる性質が想定され得ないのである。この根本的な性質の相違が看過されてはならない」ことのみを強調して、それならば価値法則・価値形態の發展がどのようにして貨幣を生成せしめるかの論理を展開することなく、一挙にして「知られるごとく

市場に於ては各商品の間には夫々唯一つの交換比率が支配し、その取引が如何なる人と人との間に行われるともこの同じ一つの價格が支配するのが特徴である。……そこで各商品との關係に於てその夫々が一千円であること示す等価物たる役割を果したものは純金一瓦なのであって、……すなわちそこで一般的交換手段たる役割を果すとともに、価値の尺度としての機能を営んだものは純金一瓦を素材とする貨幣であり、……以上に於て我々は貨幣の本質的機能は一般的交換手段及び一般的価値尺度として認識した」(同上、三九・四〇・四一・四九頁)という結論を出される。

以上の如くにして、新庄教授においては貨幣の生成過程において把えらるべき貨幣の本質規定がなされない。それは教授のいわれる「歴史的な理論」に拠られる当然の結果である。教授は「總ての社会科学が歴史的な理論たる性格をもつべきものとされるごとく、これ(貨幣論)も亦当然この性格をもつものであらねばならぬ」(同上、五頁)といわれながら、今やそれが、論理的展開は歴史的発展に照応するという正しい立場とは全く異っているものであることが明らかとなった。それは歴史的発展を追求するのではなく、歴史を分断し孤立化せしめて考察することであつた。そこには必然性は見失われ、時間的空間的相互の関連からではなく、問題は常に機械的に断定されるのみである。このような方法によって貨幣を正しく把え得るとは考えられない。

### 三、貨幣と金との関連性について

金本位制は十九世紀の遺物に過ぎないとケインズはいつた。管理通貨主義者たるケインズにとつては当然なことであり、この金の束縛から貨幣を解放しようとすることは、ケインズのみならずすべての名目主義者の根本名

題である。このような名目主義貨幣理論は、実は独占資本の経済学たる近代経済学と不可分の関係をもつものである。何とならば資本主義の全般的危機における独占資本が、最大限利潤追求のための重要な方策としてインフレーションを考へるのであるが、そのためには貨幣は金である、あるいは貨幣は金と不可分の関連をもつものであるとする時は、自由にインフレーションを展開し得ない。かくして独占資本にとっては、金の束縛から貨幣を完全に解放するところの貨幣理論が絶対的に必要である。かかる要求に応へるものこそ名目主義貨幣理論に外ならない。

既に述べた如く、新庄教授はこのような名目主義的貨幣理論を批判する形において、これに代るべき見解を主張しようとして「貨幣論」を書かれたのであり、貨幣と金との関連性については、「現在尚金が無視すべからざる重要性をもつ以上そもそも金が貨幣に対して如何なる本質關係を有するかの解明をこそ貨幣論に課せられたる最大の任務となす……」（新庄「貨幣論」序文、七頁）とされていることからその立場は推測出来るわけである。

教授は金と貨幣との関連性について、名目主義貨幣理論を批判して次の如く述べられている。すなわち「貨幣理論の上で金が貨幣にとって本質的なものと論断せられたとしても、それには果して貨幣に対する金の重要性に何等かの変化があり、各国に於て金ははや尊重に値しなくなつたと云う事実が伴われたであらうか。明らかにならぬはなかつた。実際上本質的な変化はなにもなかつた。なるほど金属貨幣は国内流通から影をひそめ、銀行券その他の信用流通によって總ての取引が行われ、各国ともに紙幣の兌換を系統的に停止し、個人による金の保有は原則的に禁止せられ、また為替の方法によらずして個人が直接正貨を現送することは非合法とされるに至つた。しかしそれは決して政府と国民が金の重要性を認めなくなつたからではなくその反対である。もし各国

ともに金の保有がそれらを自由に行わしめるに足るほど十分であったとすれば、恐らくいまでも尚お総てを會つてのごとく自由にあらしめるのが理想であるとすら考えられるにちがいない。不幸にもそれだけの金がないために、金の使用を絶対不可欠とするものに限つて最も合目的に使用、節約するために、中央当局は止むなくその集中管理を行い、個人の現送に代えて、中央当局がとりまとめてこれを行うこととし、さらに必要な限度に於て為替管理をも行いつつ、會つてのごとき金貨への兌換に代えて一定相場による外貨（その国の貨幣が直接金に結びついている外国の貨幣）への転換（外国為替の売却）を許すこととしたのである。従つてこれによつて国内通貨と本位貨幣との聯繫は間接的に依然として失われずに持続されたものである。もし現在に於て金が他の總ての財貨と全く同様な單純な一個の財貨に過ぎぬものであれば、敢えて金を特別のものとして重視する必要はもとよりない。しかし金が他の總ての財と同一視し得ない何等か特別の財貨と見らるべき限りに於ては、そのよつて来る所以を明確ならしむること貨幣理論の任務とすべきであつて、単に言葉の上でそれが貨幣と無關係であることを力説することによつて問題の解答が与えられるわけではない。換言すれば金が貨幣と本質的に無關係であり得るためには必ずやそれを可能ならしむべき諸条件が存すべくその条件の満足なくしては關係は切断されない。しかもそれらの条件を明らかにするには単に貨幣として切離して見るのではなく、現代貨幣經濟の如実の分析を不可欠とするであらう。かように考えてくると貨幣理論の名目主義的傾向は貨幣經濟の眞実の分析に裏付けられたものと見ることはできず、その成果が生産的であつたとは云い難い。それは觀念的な、もしくは流通經濟の表面の觀察に偏したものと評すべきであり、その後の發展に行詰りを来す状態にあるのも当然と云えよう」と（同上、三二―四頁）。

新庄教授の名目主義に対する批判を長々と引用したが、それは名目主義の欠陥を指摘しているという点では了

解し得るとしても、なおわれわれは教授の所論に対して異論なきを得ないのである。ところで、貨幣と金との関連性についての教授の所論を検討するためにはあらゆる角度からなされる必要があり、そのためには教授の「貨幣論」第五章以下にも触れねばならない。然しそれは後の問題として、ここではまず第四章までに限って問題とす。であらう。

既に述べた如く、貨幣成立の当初における貨幣商品には貝殻・家畜・石塊・穀物・布・塩・金屬片等々多種多様であった。それらはそれぞれの社会における自然的・社会的諸条件によって貨幣となったのであった。それらの貨幣商品は、今から考えれば極めて不十分なものであるけれども、当時においては貨幣商品として最適のものであった筈である。それらが最適のものであったというのは、その当時における商品流通⇨貨幣流通の発展段階においてはその意味である。したがって生産力が発展し、商品生産⇨商品流通が發展するにつれて、それまで最適であったところの貨幣商品も、さらにより適した貨幣商品に席を譲らざるを得なくなる。このような転換が幾度か重ねられて遂に最も貨幣商品に適するものに到達したのであり、それが金であったのである。

何故に金が貨幣商品として最適であるかという説明として、新庄教授は「商品の生産制下の市場的交換に於ては貨幣は価値の尺度としての役割を果さねばならず、貨幣の素材はこれに適するものでなければならぬ」とされ(同上、四五頁)、それに続いてシェボンスの挙げたところの、①それ自身効用と価値を有すること、②運搬の容易なること、③質が均一であること、④分割が可能であること、⑤その価値に安定性があること、⑥正当な貨幣であることが容易に識別されること、の七つの要件が貨幣商品にとって必要であるとされる。ところで、貨幣商品は何故にこのような諸要件をもたねばならないかについて、教授は「抑々素材的に品質の均等が保証され、

均等に細分化するもそれに比例する価値を表現し得ると云うごときものでなければ、精確に価値を測定し、表現するに適當しないのである」とされるのみである（同上、四四―四五頁）。このような説明が必ずしも誤っているのではないけれども、それが極めて簡単かつ機械的であるが故に、そこから種々の誤謬が引出される危険がある。事実、教授はやがて国際金本位制の確立を述べるに至って、クナップの説を引用し、国際金本位制の確立は当時資本主義最強国が金本位であったためであるとし、全く偶然性のうちに問題が解消されてしまっている。これについてはさらに後に触れるであろう。

貨幣商品が結局おいて金に統一されるのは決して単なる偶然として生ずるのではなく、貨幣に内在する必然的なものとして把握されねばならない。貨幣商品の金への転換が具体的には如何に偶然的な姿をとろうとも、その偶然は単なる偶然としてでなく、貨幣商品の金への必然的統一過程における一契機としての偶然として把握されねばならない。このような必然性は、貨幣のあらゆる諸機能のうちにあるのであって、単に新庄教授のいわれる如く価値尺度機能のうちのみあるのではない。それを順次述べよう。

まず価値尺度機能は諸商品の価値を貨幣商品の一定量として測定し尺度する機能である。諸商品の価値を測定するところの貨幣商品自から諸商品と同質の価値をもたねばならないことは当然である。したがってジュポンスが貨幣商品たる要件として「それ自ら効用と価値を有すること」としているのは、効用のないものに価値はないという意味の同義反覆があるとしても当然のことである。然しそれは決して金だけの特殊性ではなく、あらゆる貨幣商品について同様であるから、貨幣商品の金たるべきことを追求していることは当然の前提条件に過ぎない。ところで貨幣はそれ自身価値をもち諸商品の価値を測定するというが、その価値とは如何なるものか。価値とは

商品に対象化された抽象的人間労働であり。それは質的に同等であり、ただ量的に異り得るのみである。かかる性質の価値を、それ自からの使用価値の大きさによって測定し尺度しなければならぬのが貨幣商品なのであるから、当然に貨幣商品の自然的性質は質的に同等でありただ量的にのみ異なり得るものでなければならぬ。さらにそれは諸商品の多種多様の価値量を表示しなければならぬから分割融合が可能であるばかりでなく、そのことによって質的変化の生じないことが必要である。貨幣の価値尺度機能は本来以上のような自然的性質をもつたものを貨幣商品として要求しているのである。家畜・貝殻・石塊などがその要求に応じ得ないことは明らかである。貨幣として十分に機能し得ないものであったが故に、当然他のより適当なものに転換すべきであったのである。穀物・布・塩・金属片などはその要求を充し得るが、金属が最も適している。

然し以上のような性質は鉄・銅・銀・金などあらゆる金属のもっている性質であつて金のみの特殊性ではなく、したがつてこの性質が貨幣商品を金に統一したのではない。そのためには他の要件が考えられねばならない。すなわち既に述べた如く、貨幣は一般的価値尺度と一般的交換手段の二機能の統一体として成立するものであるが故に、次には流通手段の機能を具す貨幣商品として如何なる自然的・社会的要件を必要とするかが考察されねばならない。

貨幣が流通手段として機能することは、貨幣が  $W \mid G \mid W$  または  $G \mid W \mid G$  として商品流通の一環としての一商品の形態転換を媒介しつつ、または資本の循環運動過程として、次から次へと無限に人々の手を渡り歩いて行くのである。その場合、若し貨幣商品の自然的性質のために持ち運びが不便であれば、あるいはその物の価値が容積に比して小さいために大きな価値ある商品を買うためには相当大量の貨幣を持ち運ばねばならないとすれ

ば、それは極めて不便なことであろう。(信用貨幣はまだ問題にならない)かくして自然的性質としても持ち運び易く、かつ少量の容積のうちに大量の価値を保有するということが貨幣商品たるに適する要件とならねばならない。殊に後者の社会的要件は、商品生産⇩商品流通の発展に伴うて大量の商品売買が頻繁に行われるようになる、その必要は一層切となる。この点において鉄銅などの卑金属よりも金銀などの貴金属が貨幣商品に適するものとなる。貨幣の歴史的推移もそのように進んで来たのであった。さらに流通手段機能を果たすために貨幣商品にとつて必要な要件としては、それが絶え間なく人々の手を移転するのであるから、容易に滅失しないことが必要である。この点でも金属は他の貨幣商品より有利であったし、金属のうちでも腐蝕しない金が最も貨幣商品たるに適していた。さらに、流通手段としては、転々として流通する度毎に受取人が果して正当なものであるかを識別することが困難であつては不便である。この点について金は特別な光沢をもち一見して他の金属と識別することが出来るので便利である。その他種々の立場からしても流通手段機能を果たす貨幣商品としては金が最も適していることを知るのである。

次に、価値蓄藏手段および支払手段機能を果たす貨幣として貨幣商品に如何なる要件を必要とするか。貨幣をもつて価値を蓄藏する場合、その価値が絶えず変動すれば、殊にその価値が急激に低下するような場合があるとすれば価値蓄藏の機能を全く果し得ない。また支払手段機能を果たす場合、その価値が絶えず変動すれば、その度毎に債権者と債務者の利害關係は対立し、貨幣価値が下れば債権者は不利、債務者は有利となり、逆の場合は逆の結果を生ずる。かくして価値蓄藏手段および支払手段としての機能を果たす貨幣としては、その価値の不変であることが望ましい。然し貨幣が諸商品の価値尺度たり得たのは、諸商品と同質の価値であるからであり、それは生

産諸条件の変動とともに絶えず変動することは避けられない。貨幣価値の不変であることは論理的に不可能である。然し實際上価値の屢々変動することは望ましくない必要からして、結局比較的の価値変動の少ない商品が貨幣商品たるに適するということになり、金は相対的にこの条件に適している。

以上の如くにして、国内的諸条件の下において考察される貨幣の諸機能が貨幣商品に要求する自然的・社会的諸条件は、いずれも金が最適の貨幣商品であることを示している。それは多種多様な貨幣商品の金への統一過程としての歴史的事実とも完全に一致するのである。かくして貨幣商品の金への統一は決して偶然的事情に支配された結果ではなく、それは貨幣の内在的要求の必然的結果として考えねばならない。この意味においてマルクスは、貨幣は生れながらにして金であるといったのである。ただ各社会の自然的条件によって貨幣の金への統一過程が円滑に行われ得なかつた場合も稀ではない。金生産のない国または少ない国においては止むを得ないことであつた。然しながら、かかる国内的事情は商品流通の発展に基ずく国際的商品流通の展開によって必然的に解消されねばならない問題であつた。したがつて次に国際的諸関係の下における貨幣の金への統一過程を考えよう。

国内的商品流通の発展の結果として必然的に世界的商品流通が展開され、それは同時に国内的貨幣流通の世界貨幣流通への拡大発展である。世界的商品流通—貨幣流通の端初は既に古代ギリシヤにおいて見られたところであるが、それが全面化するに至つたのは十六世紀以後のことであり、したがつてここに世界貨幣が充分の姿で現われて来るのである。この場合、如何なる世界的商品が世界貨幣として登場するに至り、それが結局如何なる貨幣商品に統一されるに至るかの問題は、既に述べた国内的諸要件の下におけると本質的には異なるところはない。そこで主権を異にする諸地域間の問題であるから種々の相違点はあるけれども、結局諸商品の価値尺度・流通

手段・価値蓄藏手段・支払手段としての諸機能を果すものとして世界貨幣は成立するのであるから、それらの諸機能を最もよく果し得るものが金である以上、金こそが世界貨幣たるべきことが、貨幣の内在的必然性として与えられているのである。

ところで新庄教授がこの問題を如何に述べられているかを見よう。教授によれば、貨幣商品として「金属、特に貴金属が最適のものであることは容易に首肯し得るところであろう。しかし地球上のあらゆる国が金銀を採掘し得る鉱山をもつてないから、貨幣としての素材が漸次金銀の二つに集約され、最後に金のみが選ばれるに至ったことは、各国が夫々貨幣として最も適当なるものを自然的に合理的に選択せる結果と見るべきではない。

地球上の或る地帯ではその自然的条件に恵まれて早くから云わば偶然に金銀のごときものを貨幣として使用したとしても、他の地帯では遙かに遅れて尚貨幣なき自然経済の段階にあり、また他の地帯では金銀以外の他の財貨を貨幣として用うると云う状態にあつたであろう。しかし近接せる集団社会の交換の範囲が徐々に拡大されてくるに従つて、その拡大された地域を地盤とする新しい流通社会について貨幣の共通化が要請されるのであつて、しかもその際経済的後進国は自らも、それと交易をもとうとする先進国の貨幣と等しいものを採用することを便宜とするから、自ら後者に合流することを余儀なくされることとなり、そのような形で貨幣素材の共通化、単一化が進展したと見るべきである」と(同上、五六―七頁)。それに続いて次のようなクナップの文句を引用される、「金本位制の普及は結局に於て対外相場の理由による。その素材的金属がとにかく商業政策上最も有力な国家に存在していたため(一八七一年)弱勢な諸国はこれに順応せねばならなかった。仮りにもし有力な国家に銀本位制が存在していたとすれば対外相場の理由から銀本位制の一般的採用に有利な主張が同様に強く唱えられ

たてもあろう」と（クナップ「貨幣国定学説」宮田訳、三八六―七頁）。

以上の如き教授の所論からすれば、国際金本位制の成立は、全く便宜的なものとして、あるいはまた全く偶然的なものと解せざるを得ない。教授がクナップの文句を肯定されるとすれば、当時資本主義強国たるイギリスが偶然にも金本位であったが故に、世界各国がこれに倣うことによつて国際金本位制が確立されたのである。したがつて若し有力な国が尚銀本位であったならば、国際金本位制ではなくして国際銀本位制が確立されたであろうということにもなる。そのように想像することも出来るであらう。然し想像と科学とは區別されるべきであり、科学は与えられた客観的諸条件の中に貫徹されている必然的法則性を発見することである。教授においては、国際金本位制の確立はあくまでも貨幣そのものの内在的必然的要求に應えるものとして成立したものであることが認められず、問題がすべて偶然的なものに解消されてしまっている。

教授による問題のこのような取扱方は、国際金本位制の確立に偶然的な機会を与えたとされるところのイギリスの金本位制確立の諸事情についても同様に採られている。すなわち教授はイギリスにおける金本位制確立を次の如く述べられる。「他国に比してイギリスが最も早く金本位制をとるに至つた根本的理由としては、イギリスの貨幣制度に於ける金銀比価の定めが大陸諸国の比価に比し、従つてまた金銀の市場比価に比し、銀に不利にして金に有利であったと云ふ事實に帰せられる」と（同上、九六頁）。結局、それは十七世紀末葉において偶然にもイギリスにおける金銀比価が大陸諸国のそれに比して、金に有利に、銀に不利であったがため、イギリスからは銀が流出し、金が流入して金貨のみが流通するようになった。このような偶然的事情が当時資本主義的に最強国となりつつあったイギリスをして金本位国たらしめたというのである。われわれといえども以上の如き諸事情を

無視するのではない。然し問題は、そのような諸事情が表面的に如何に偶然的の如く見えようと、それだけに固執する時は一面的觀察に終らざるを得ないという点である。われわれが絶対に看過してならないことは、当時ヨーロッパにおいて、殊にイギリスにおいて急激に發展しつつあった資本主義、それは商品流通—貨幣流通の急激なる發展であり、それは貨幣制度として銀本位制または金銀複本位制から金本位制に移行すべき客觀的条件を急激に成熟せしめつつあったことである。それは貨幣の金への統一の必然的過程である。そのような必然性の中での偶然的事実として金銀比價の相違の問題が出て来るのであり、その偶然的事実か契機となつてイギリス金本位制の確立が考えられねばならない。このような偶然を貫く必然の中でイギリス金本位制の確立が考えられるならば、それと全く同様に、このようなイギリス資本主義を先導者として急激に發展しつつあった世界資本主義における世界貨幣が、必然的に國際金本位制の確立となるに至つたことも当然のこととなるであらう。

(後記、貨幣と金との関連性は、以上の点よりも実は、紙幣と金、兌換銀行券と金、特に不換銀行券が一般化し、表面的には貨幣と金との関連性が切斷されているが如き現状において、それを如何に考えるかこそ問題なのであるが、それは次号にまわさざるを得なかつた。)